

(続紙 1)

京都大学	博士 (地域研究)	氏名	平山 草太
論文題目	カメルーンにおけるイスラーム関連書物の利用		
(論文内容の要旨)			
<p>本論の目的は、カメルーン共和国のムスリムが書物に対してどのような関係を取り結んでいるのかを記述し、その特徴と広がりを検討することである。</p> <p>第1部の第1章は、西・中部アフリカのイスラーム研究に大きな影響を与えた、クルアーンの「身体化」という概念とその受容史の批判的検討から出発する。続いて、イスラームの人類学における「我々はいかにしてイスラームを見いだしうるのか」という議論をレビューした。そしてこれらがともに、カリグラムの書物観に基づくことによる限界を指摘し、読書史研究における「領有」概念を鍵として新たな書物観を探究する必要性を主張した。第2章では、カメルーン共和国の言語や宗教の分布等の基礎情報、及びチャド湖周辺地域からカメルーン南部地域にイスラームの影響力が拡大した歴史的経緯を概観した。第3章では、首都ヤウンデにおける「スーフィー」と「スンナの民」の紛争について、その分断を可能にしたモスクに注目して記述・分析した。</p> <p>第2部はヤウンデのイスラーム書店で見られる書物観について論じた。第4章では、イスラーム書店を経営する一族、書物の輸入や販売ルートなどについて民族誌的記述を行い、ナイジェリアのカノを中心とする書物流通圏の周縁部にヤウンデが位置づけられることを示した。第5章では、ヤウンデ最大のイスラーム書店にて在庫書籍の全数調査を行い、そこでの書物の「領有」実践は、単にその書物が読まれることに留まらず、その書物の造形的「形式」の画一性を保ったまま拡散していくことだと論じた。さらに第6章では、書物の「形式」と「内容」が相互反動的に結びつく関係を分析した。加えて、「カノ書物圏」の周縁というヤウンデの地理的・歴史的条件が、書物の造形的「形式」を押し広げるような「領有」実践を導いていることを論じた。第2部の結論では、その「形式」の特徴は、造形的表象としての性質と言語的対象指示としての性質が、つねに同時に与えられるという点にあることを示した。</p> <p>第3部では、こうして得られた書物観を、カメルーンにおける様々な書物の「領有」実践に重ね合わせ、その記述のモデルとしての適切さを検証した。第7章では、主にクルアーン学校でのアラビア文字学習の方法を記述した。ここでは、文字の読み方自体よりも、読み方を学ぶための身体的な振る舞いに習熟することを重視する。それは、大人たちの「読書」にも共通する態度である。第8章では、ムスリムによるアソシアシオンの設立実践を記述・分析した。この実践は、官僚制的な「想像力の偏極構造」を特徴とするライシテ体制のもとで、自己目的的なゲームになっている。さらに、その実践の中心にある定款は、「コピペ」でつながる非表象的な定款のネットワークに組</p>			

み込まれることにおいて／として作成される。第9章では、クルアーンの文字を使った「呪術」の特徴と、そこに見られる書物観について考察した。この「呪術」の特徴は、特定の方法で文字を一旦可視化したのち、それを物理的に操作し、もう一度不可視化することである。こうした「呪術」の過程は、文字が同時に持つ2つの「形式」に触れる方法として記述することができる。これは、先行研究のような倒錯的な「他者化」に走ることのない「呪術」観を導く。

終章では、本論の出発点であった「身体化」概念の問題に立ち返り、上記の記述モデルによる捉え直しを経ることで、造形的表象であると同時に言語的記号でもあるという書物観に基づく新たな研究の重要性について考察した。